

文法の教養とヘボンの文法論

金子 弘

1. はじめに

本稿では、ヘボンの文法論の拠って立つところを、西洋の文法教養との関連で整理してみたい。それは、ヘボンの日本語研究をその前の時代の日本語研究との関係で位置づけるのではなく、同時代のヨーロッパ語学の中で捉えてみようとするものである。

ヘボンの文法記述は、『和英語林集成』第2版(1872)及び第3版(1886)の序説 introduction において見られる。その文法の枠組みの中で、それ以前の日本語研究と異なるところとして、

a. 品詞ごとの説明が「冠詞 article」から始まる

b. 動詞活用を3つに整理する

という点を指摘した(金子 1995a, 1995b)。そうした整理法がヘボン以前にもないわけではないという点を重視するなら、前代のものを引き継いだからであり問題とはならない。しかし、ホフマンやブラウン、アストンなどの優れた業績が既にあり、序文 preface でその業績を高く評価しているにもかかわらず(注1)、a や b のような記述となっているのである。したがって、単に前代の誰かの枠組みを踏襲したのではなく、一定の基準があったと考えることができる。それは、ヘボン当時の文法教養と関連づけることによって解決できるのではないかというのが、本稿の趣旨である。

2. ヘボンの受けた文法教育

まず、ヘボンが受けた文法教育について確認しておく。James Curtis Hepburn は、1815年ペンシルヴァニア州ミルトンに生まれた。その教育歴は、次のようであった(注2)。まず家庭において主に母から種々の教育を受け、続いて生まれた町ミルトンのミルトンアカデミー Milton Academy で学校教育を受けた。その後、当時の教育制度が十分でなく、大学進学者が少なかったこともあって、1831年16

歳で、父が卒業したプリンストン大学 Princeton College の3年に編入した。ただし、アジアコレラが流行したことから大学も閉鎖され、わずか1年半で卒業。その後、フィラデルフィアのペンシルベニア大学の医学部に籍を置き、1836年、21歳で医学博士の学位を得た。

ヘボンが教育を受けた「アカデミー」という学校は、中等教育の学校であり、アメリカ植民地時代の主流であったイギリスのグラマースクールの流れをくむ学校と、次の公立ハイスクール public high school の間に位置する学校である(注3)。アカデミーの具体的なカリキュラムとして、フィラデルフィアのフィリップス Phillips 兄弟によって起こされたアカデミーの起草書を見ると、

フィリップス・アカデミーは英文法・ラテン文法・書方・算数及び青少年が普通に授けられている科学を学ばせるだけでなく、さらに生活の偉大な目的と実際の実務を学ばせる目的を以て、公立無月謝の学校即ちアカデミーの基礎をすえようとするものである。……さらにいえば、この学校の第一の主要な目的は真実な信仰と徳を培うにある。そして第二には書方・算数・音楽及び弁論と共に、英語・ラテン語・ギリシャ語を授けるにあり、第三は実用的な幾何と論理と地理学を学ばせるにあり、第四には今後機会と能力が許すかぎりその他の学芸や化学や言語を学ばせるにある。(注4)

とあるように、英語やラテン語に加えて実用的な教育も目指している。例えば、1799年における教科は、「英語・フランス語・ラテン語・ギリシャ語・地理・算数・実用幾何・修辞学・倫理学・物理・歴史・天文・道徳学・自然摂理」(注5)であった。ただし、その「古典部 classical department」のカリキュラムは、ボストンラテン学校 Boston Latin School と同じであって、エクセターのフィリップス・アカデミー Phillips Exeter Academy における1788-1838年間の初年度 (First Year) 科目は、

Adam's Latin Grammar
Liber Primus or similar work
Viri Romani or Caesar's Commentaries
Latin Prosody
Exercise in reading and making Latin
Virgil
Arithmetic
Ancient and modern geography(注6)

である。最後の二つを除けば全てラテン語学習に関係するものである。実用を目

指した学校とはいっても、いかにラテン語が重要であったかがわかる。ヘボンの受けた教育が同じカリキュラムであったわけではないが、ヘボンが受けた言語教育が、第一にラテン語教育であったことは確かである。

続いて、わずか1年半ではあるが、プリンストン大学で教育を受けている。その中で化学実験の授業を重視するヘボンに対して、新任の総長グリーン Ashbel Green が古典の大切さを訴えた。グリーン総長はヘボンを総長室に呼び、科学の用語がラテン・ギリシャ語起源であるなどの点から、古典軽視が誤った見解であることを説いた。そのアドバイスにしたがって、青年ヘボンは、ラテン・ギリシャならびにヘブライ語を学んだ。

このようにして、ヘボンは、ラテン語・ギリシャ語などの古典語教育を受けていたと言える。こうしたことは、当時一般の学生にとって当然のことと言えるが、ヘボン自身が晩年の回想において、グリーン総長の助言に感謝している点からして、その当然な古典語教育を十分に身につけていたことを確認しておきたい。

3. ラテン語文法の動詞記述とヘボンの動詞活用分類

さて、ヘボンが学んだラテン語文法との関連で「b. 動詞活用を3つに整理する」という点について考えてみたい。ヘボン2版における動詞活用の整理は、次のようになっている。

The verbs might be naturally arranged into two Conjugations, according as the root form of ends in i or e ; but as there are quite a number of verbs whose root forms end in i , which take the auxilliary syllables whithout change, it is thought better to classify these into a separate conjugation, thus making three. (2版序説 p.xx。3版序説 p.xx もほぼ同じ。)

〔私訳〕動詞は、語根形が i か e で終わるということから、二つの活用型に分類するのが自然かもしれない。しかし、助動詞的な言葉を取るとき変化せず、語根が i のままである動詞が非常に多くあるので、こうしたものを別の活用型に分類するのがよいと考えた。したがって三つの活用型となる。

まず語根（辞書形＝連用形）の最終母音に注目し、それを i と e で終わるものに分けて、次に i の中を二つに分けるのである^(注7)。

- | | | | | |
|-----|-----|-----|-------|----------------------------------------------|
| 語根が | ① i | ①' | 語根変化 | first conjugation (Yo-dan nohataraki) |
| | | ①'' | 語根不変化 | second conjugation (Kami-ni-dan no hataraki) |
| | ② e | | | third conjugation (Shimo-ni-dan no hataraki) |

3版では第2活用と第3活用の内容をそっくり入れ替えて記述しているにもかかわらず

わらず、分類の基本原理は変わっていない。こうした整理法は、ラテン語文法の整理法を忠実に適用したものであると言える。当時のラテン語文法書の代表として、イートン・ラテン・グラマー Eton Latin Grammar^(注8)として知られる文法書を見てみよう。それによると、動詞の分類は、以下のように4つに分かれる。

VERBS have four conjugatins, which are known after this manner :

The first conjugation hath a long, before re and ris : as, amare, amaris.

The second conjugation hath e long, before re and ris : as, docere, doceris.

The third conjugation hath e short, before re and ris : as, legere, legeris.

The fourth conjugation hath i long, before re and ris : as audire, audiris.

ラテン語文法の常識的な見解では、動詞の現在幹の最終母音（幹母音）の差によって動詞を分類するのである。こうした4分類の伝統は、かなり古いものであって、ネブリハやアルバレスのラテン文法においても見られる^(注9)。また、現代のラテン語文法の整理法も同じである^(注10)。そうした伝統的な分類を見るならば、日本語の動詞を、語幹末尾の母音差によって分類するという基準が容易に思いついたものと考えられる。

さて、そうしたラテン語の動詞分類の基準を用いたものとして、当然視野に入るのがキリシタンの文法研究である。ところが、ヘボンの分析とキリシタンの分析とは異なっている。ロドリゲスを例にとると、3つに分類するという点は同じだが、

第一種活用（下二段・上一段・上二段）

第二種活用（四段）

第三種活用（ハ行四段）

の3つに分類する^(注11)。こうした分類になるのは、ロドリゲスが中世の日本語動詞の基本形（連用形）の末尾音節を基準としたためである。すなわち、

第一種活用 動詞語幹末尾がEで終わる（語幹は「語根」のこと）

第二種活用 動詞語幹末尾がIで終わる

第三種活用 動詞語幹末尾がA I, U I, O Iで終わる

という分類基準である^(注12)。第三種を別立てしたのは、二重母音という特殊性があったからであろう。また、第一種の中には、「浴びる」「見る」などが含まれている。それは、語幹はIで終わるものの、活用の方法が第一種に準ずるからである。

ヘボンはロドリゲスの第三種について、見出しとして、初版では「OMOI, -ō, -ōta」、二版では「OMOI, -ou, -ōta」、三版では「OMOI, -OU」のように出して

いる。二重母音ということで、他の動詞見出しの出し方とは異なっているが^(注13)、序説における整理では第一活用型に所属させている。二重母音で終わるということよりも、末尾の母音を重視したことになる。そうした末尾母音を分類の第一基準とした場合、上一段・上二段の動詞は、Iで終わる動詞として、分類されることとなる。ヘボンの動詞活用の分類は、ロドリゲスの成果を受けつつも、ラテン語で常識的な動詞語幹末尾の母音による分類を適用したものなのである。

こうした分類は、日本語の枠組みに配慮して分類するというよりも、ラテン語の枠組みを適用する傾向が強いと言える。そうした点を、ラテン語文法の機械的な適用と考え、ロドリゲスの分類から後退したと見ることもできる。しかし、当時の研究水準やブラウンとも深い親交を結んでいたヘボンが、そうした機械的適用をしたと考えるには無理がある。むしろ、別の何らかの意図があったと考えるべきであろう。一般に辞書の序説の文法記述が、その辞書を使うため、また普通の読者のためと考えるならば、文法として親しみやすいラテン語文法にまずはしたがって分類するというのも、教育的配慮として十分に考えられる。2版の序文では、序説について、次のような記述がある。

In the Introduction, the author has endeavoured to give a brief abstract of the Japanese Grammar, with the especial object of making the dictionary more intelligible, as well as of rendering some assistance to those who may not have access to more special works on this subject. (2版 preface p.vi)

〔私訳〕序説においては、この辞書をより解りやすくするために、また文法についてより専門的な著作を手に入れられない人への補助として、日本語文法の簡単な概略を記すことに心を砕いた。

この辞書を使うため、そして専門的な知識を持たない人のための文法記述であることが伺える。その結果が、それまでの日本語研究と異なるヘボン独自の動詞分類となって現れた、と考えるのがよいだろう。

4 ヘボンの品詞論と英語学

ヘボンの文法記述は、2版と3版の序説 introduction であるが、動詞分類以外に他の研究者と異なっているのが最初に示した「a. 品詞ごとの説明が「冠詞 article」から始まる」点である。ヘボン自身は、parts of speech とか classification of words といった表現を使っていないので、全体の品詞分類を厳密に考えていなかったとも言える。しかし、各見出しには品詞名や他動詞・自動詞の区別を記しているのだから、一定程度の基準があったと考えてよい。第2版の文法記述で

は、次のような品詞区別を認めることができる。

Article, Noun, Adjective, Pronoun, Verb, Adverbs, Post-Positions, Conjunctions

(冠詞 名詞 形容詞 代名詞 動詞 副詞 後置詞 接続詞)

第3版では、次のようになる。

Article, Noun, Adjective, Pronoun, Numerals, Ordinal Numbers, Verb, Adverbs, Post-Positions, Conjunctions

(冠詞 名詞 形容詞 代名詞 数詞 序数詞 動詞 副詞 後置詞 接続詞)

こうした分類は、全体として見るとどの日本語研究者の分類とも異なってる。他との比較で特徴的な点を挙げると、次のようになる。

- ①冠詞を説明に入れている
- ②間投詞(感動詞)を説明に入っていない
- ③「形容詞・代名詞」という記述順である

まず冠詞についてであるが、日本語文法の説明であるから、冠詞が無いという事実は変わらない。したがって、ヘボンの記述も、

There is no Article in the Japanese language. (2版 Introduction p.xvi, 3版 p.xiv)

という簡単な説明で終わりである。ここで問題となるのは、この記述が日本語の文法体系を説明するのに無駄な部分である以上、いったいいかなる意図の基に記述されたメッセージなのかということである。この記述は、誰に対して発せられたものであろうか。当然日本語学習者であろう。ヘボンが想定する日本語学習者には、「日本語には冠詞が無い」という情報が有用なのである。とするならば、冠詞が問題となるような言語の文法知識を持っている人ということになる。それは、英語話者である。そこで、英語話者の文法知識——ここでは品詞分類の知識を、考えてみよう。当時の日本語研究と関連すると、冠詞のある言語としてのオランダ語やドイツ語、フランス語の知識ということも問題になるが、ここではそうした言語の影響を考える必要はないであろう(注14)。

当時の英文法の代表として、ジョンソン、ウェブスターの二つの辞書の序説に相当する箇所の文法記述と、学校文法に貢献したとされる、ロース、プリーストレー、マレーの文書を見てみると次のようになっている(注15)。

ジョンソン 1.Article 2.Nouns Substantives. 3. Adjectives. 4.Verv.

ウェブスター 1.The name or noun. 2.The pronoun or substitute. 3.The adjective, attribute or attributive. 4.The verb 5.The adverb 6.The pré-

position. 7.The connective or conjunction. 8.The exclamation or interjection.

ローズ 1.Article 2.Substantive, or Noun. 3.Pronoun. 4.Adjective. 5.Verb. 6.Adverb. 7.Preposition. 8.Conjunction. 9.Interjection.

プリーストレー 1.Nouns, 2.Adjectives, 3.Pronouns, 4.Verbs, 5.Adverbs, 6.Prepositions, 7.Conjunctions, 8.Interjections.

マレー 1.Article 2.Substantive 3.Adjective. 4.Pronoun. 5.Verb. 6.Adverb. 7.Preposition. 8.Conjunction. 9.Interjection.

(イートン・ラテン・グラマーのラテン語品詞分類 1.Noun, 2.Pronoun, 3.Verb, 4.Participle, 5.Adverb, 6.Conjunction, 7.Preposition, 8.Interjection)

これらをまとめると、次のようになる。

①冠詞から始めるもの ジョンソン ローズ マレー

②間投詞を説明に入れていないもの ジョンソン

③「形容詞・代名詞」という記述順のもの プリーストレー マレー

②の間投詞について、ジョンソンの説明に無いのは、4品詞ししか挙げられていないことによるものであって、欠如とは言い難い。また、間投詞はヘボンの文法記述にないものの、初版の段階から略語表に、

exclam. ◊ (=stand for) exclamation or interjection

とあって、辞書中の語の説明には登場する。したがって、間投詞が見られないのは、説明を要しない等のヘボンの判断があったのではないかと考えられる。したがって、②をヘボンの特徴と見なす必要はない。

また③については、金子1995aや金子2002で示したように、ホフマン以降の日本語研究において、形容詞を動詞の一類（用言）とする認識が浸透したこととの関係で、形容詞を代名詞よりも後に説明する傾向が顕著なので、当時の日本語研究の主流からは外れている。しかし、英文法の伝統においては、いまだ形容詞・代名詞の順が守られているのである^(注16)。

そこで、①③の特徴を重視すると、二つに共通して現れるマレーの文法書を念頭に品詞分類を考えていたのではないかと推察できる。マレーは規範文典の大成者であって^(注17)、約200版を重ねた文法書である。ヘボンがそれに則って文法記述を行ったのはそれほど特異なことではない。というよりも、ヘボン自身の常識的な文法枠組みは、当時のヘボンの辞書使用者の一般的枠組みであって、そうしたことを意識的・無意識的に前提としたのがヘボンの文法記述だということであ

る。そうしたヘボンの文法枠の更なる実態の解明は、今後の課題としたい。ただし、マレーの文法枠組みをそっくり採用したのではなく、他の文法記述も基になっているのは確かなようである。例えば、ヘボンの他動詞・自動詞は、transitive verbとintransitive verbとなっているが、マレーの段階では、まだverb activeとverb neuter とするのが主流であって、用語に違いが見られる。

ヘボンの品詞論が他の日本語研究者のそれと異なっているのは、あくまで日本語研究という流れの中に置いて比較した場合であって、英文法の枠組みを見るならば、その適用であることは明らかである。

5 おわりに

ヘボンの枠組みの特異な部分が当時のラテン語文法や英文法の影響によるものであることは、ある意味当然のことであろう。それは誰でも思いつくことであって、ことさら述べ立てることではないのかもしれない。しかし、以上の考察によってラテン語文法や英文法のいかなる部分が影響しているのかを、幾分かは示し得たと思う。

本稿で述べたのは、ラテン語や当時の英文法の枠組みが覆い被さっているという目を見た場合、ヘボンの研究がなぜそのような整理法であったのかが、より納得できる形で受け入れられるのではないかという提案である。そうした観点を全面に押し出した論考は見られないようなので、その点に本稿の意味もあるものと考えて。また、他の日本語研究者の破綻と見られる部分も、同時代のラテン語学や各国語学、また比較言語学などとの関係で見直すことによって、新たな解釈が可能なのではないかと考えるが、これも今後の課題である。

〈注〉

1. 2版序文 preface p.vi には、

Those who may wish to extend their acquaintance with the grammar still further, will find the profound and philosophical work of J. J. Hoffman, Phil. Doct., published at Leiden in 1868, to be quite exhaustive of the subject. The works of Rev. S. R. Grown, D.D., and of W. G. Aston, M.A., will be found also of much use. とある。3版ではこうした言及は削除されている。

2. ヘボンの伝記については、次の書を参考にした。

Griffis, William Elliot, 1913, Hepburn of Japan : and his wife and helpmates : a life story of toil for Christ. Westminster Press.

山本秀煌, 1926, 『新日本の開拓者ゼー・シー・ヘボン博士』聚芳閣

高谷道男, 1986, 『ヘボン』新装版 (人物叢書 日本 歴史学会編), 吉川弘文館

3. アメリカの中等教育のカリキュラム研究は、次の書を参考にした。
Leonard, J. Paul, 1946, *Developing the secondary school curriculum*. Rinehart&Co., New York.
倉沢剛1985『米国カリキュラム研究史』風間書房
4. 注3 倉沢 p.49の訳による。
5. 注3 倉沢 p.50。
6. 注3 Leonard p.18。
7. first conjugation 等はヘボンによる命名。その後()で括って示した Yo-dan no hataraki 等は、3版における()付きの命名。
8. *An Introduction to the Latin tongue, 1758, conjugation of VERBS ACTIVE* (p.19), *English linguistics, 1500-1800, a collection of facsimile reprints no.255* Menston, Yorks. Scolar Press, 1970.
9. ネブリハとアルバレスの文典は次のものを参照した。
ネブリハ Nebrija, Antonio de. *Introducciones latinas contrapuesto el romance al lain* (c. 1488), Munguel Angel Esperza & Vincente Calvo (ed.). -Munster: Nodus-Publ., 1996.
アルバレス Alvarez, Emmanuel, *Emmanuelis Alvari e societate Iesu, Classica Japonica. Section 5: Linguistics II-1*, 天理大学附属天理図書館, 1974)
10. 『言語学大辞典』(1992, 三省堂)の「ラテン語」の項目には「規則動詞は、現在幹によって、4種類に分けられる」(Vol. 4, p.676 左)とある。その他のラテン語の教科書を見ても、現在に至るまで、ラテン語の基本的枠組みである。
11. 「第一種活用」等の用語は『ロドリゲス日本大文典』(土井忠生訳, 1955, 三省堂)による。()内の「下二段」等は現行一般の名称として金子が付けた。
12. 土井忠生の訳本 pp.28-30 をまとめると以上ようになる。
13. 例えば、「咲く」の見出し提示は、次のようになっている、子音を含む音節を語尾として掲示している。
1版 SAKI,-ku,-ita 2版 SAKI,-ku,-ita 3版 SAKI,-KU
14. この他にギリシャ語の品詞論を考慮すべきであるが、いまその用意がない。トラークス Thrax のものは、Robins, R. H. の *Diversions of Bloomsbury* (1970, Amsterdam, p.198)によれば次のようである。
noun verb participle article pronoun preposition adverb conjunction
(名詞 動詞 分詞 冠詞 代名詞 前置詞 副詞 接続詞)
15. 各書の参照本は、次の通り。
Samuel Johnson : *A Dictionary of the English Language* (1755) (1968年復刻版)
Webster : *An American dictionary of the English language* (1828) (1976年講談社による復刻版)
Lowth, Robert : *A short Introduction to English Grammar*. 英語文献復刻シリーズ 第13巻, 南雲堂1968 (1769年版)
Priestley, Joseph : *The Rudiments of English Grammar*. 英語文献復刻シリーズ 第14巻1971 (1761年刊)
Murray, Lindley : *English grammar, adapted to the Different Classes of Learners*. 英語文献復刻シリーズ 第19巻, 南雲堂1971 (1806年版)

16. ヘボンの当時、「形容詞・代名詞」の提示順が一般的であったかという点、そうも言えない。例えば、慶應義塾読本『ピネヲ氏原板 英文典』（明治3年、尚古堂発兌）では、noun pronoun adjective verb ...という順になっている。
17. 英語史におけるマレーの評価は、定まったものと言っていい。渡辺昇一1971『英語学史』（英語学大系13）大修館の455ページ以降の記述や林哲朗・安藤貞雄『英語学の歴史』（英語学入門講座3）英潮社の90ページ以降の記述を参照。

《参考文献》

- 金子 弘（1995a）西洋人の日本語研究における品詞の整理（『創価大学日本語日本文学』第5号，左 pp.15-26）
- 金子 弘（1995b）西欧人の日本語研究書における動詞活用型の分類（近代語研究会編，『日本近代語研究 2』ひつじ書房，pp.73-90）
- 金子 弘（2002）外国人の日本語文法研究史（飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座 第5巻 文法』明治書院，pp.197-217）

付記 本稿は、創価大学による「平成14年度文系学部等教員研究助成金」の成果の一部である。